

平凡社新書



1033

染谷一
SOMEDA HAJIME

ギャンブル依存

日本人はなぜ、その沼にはまり込むのか



徹底した取材で見えてきた
**ギャンブル大国・
日本の闇**

平凡社新書

依存症

日本人が陥るギャンブルの沼

染谷 一

人は何かに依存する

- 【物質】 アルコール、薬物、カフェイン、ニコチン…
- 【行為】 ギャンブル、ゲーム、買い物、キャバクラ・ホストクラブ…
- 【つながり】 スマホ、SNS、コミュニティー、恋愛…

依存は疾患か？

疾患（病気）



肉体的、精神的な不調・不都合があり、
積極的な治療、もしくは経過観察などが必要

アルコール、薬物、ギャンブル

依存症　WHOの定義

精神に作用する化学物質の摂取や、ある種の快感や高揚感を伴う行為を繰り返し行った結果、それらの刺激を求める耐えがたい欲求が生じ、その刺激を追い求める行為が優勢となり、その刺激がないと不快な精神的・身体的症状を生じる、精神的・身体的・行動的状态

治療が必要か？ 治療が可能か？

治療、もしくは第3者の介入が必要な依存

1. 日常生活に支障をきたす
2. 経済的な困窮をもたらす
3. 家族や友人、知人らに損害、迷惑をかける
4. 周囲からの信用を失う

スマホ依存、ゲーム依存は…？

日本のギャンブル依存

賭け事にのめり込み、金額や時間をコントロールできなくなる精神疾患

国内でギャンブル依存が疑われる状態になった人は約320万人。20歳から75歳の総人口の3・6%（2017年厚生労働省）

男性の3・7%、女性の0・7%、全体では2・2%が、依存が疑われる状態（国立病院機構・久里浜医療センター（神奈川県）が一般住民を対象に2020年に実施した調査）

* アルコール依存症0.9%、薬物使用経験（大麻1.4%、覚醒剤0.5%）

「ギャンブル（依存）」の有病者割合

日本 2.2 %

米国 0.42 %（ラスベガスに限ると 3.5 %）

カナダ 0.5 %

英国 0.5 %

スイス 0.8 %

マカオ 1.8 %

E G M機（Electronic Gaming Machine）電子ギャンブル機数（ゲーム機械世界統計 2016 年）

米国 86万 5 8 0 0 台

イタリア 45万 6 3 0 0 台

ドイツ 27万 7 3 0 0 台

日本 4 7 5 万 5 5 0 0 台

ギャンブル依存 とホームレス

- 全国で確認されたホームレスの数は3065人。ちなみに、「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」、および「ホームレスの自立の支援等に関する基本方針」では、「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」がホームレスと定義される。（厚労省 2022年「ホームレスの実態に関する全国調査」）

*調査方法は「市区町村による巡回での目視」なので、あいまいさや認知バイアスなどもあるはず



- 「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と「生存権」が保障されている（日本国憲法第25条）。
- 定住地、定職を持たず、社会保障など「国民のだれもが持っている権利」さえも放棄。したがって、ホームレスはすべて「わけあり」。

2003年から国内でホームレスへの支援をしてきた「ビッグイシュー日本」共同代表の佐野章二さんのコメント

「ホームレスになってしまう最大のきっかけは、借金からの逃亡。とくにギャンブルが原因である割合が大きい」

「人間の当たり前の生活を破壊する可能性には、職場での人間関係、恋愛、アルコール、薬物など様々あります。でも、たちまちのうちに、1人の人間、一つの家族を完璧に崩壊させてしまう可能性があるのがギャンブルと薬物です。そもそも、借金してまで酒を飲む人はいないからね」

日本人とギャンブル

日本人は…

礼儀正しい、生真面目、勤勉、実直、清潔、他人への気遣い、控え目、手堅い……。

戦後の混乱の後に到達した「総中流社会」では、多くの人にとって「つつましさ」「慎み深さ」が美德とされ、決して大風呂敷を広げたりせず、分相応な「そこそこの幸せ」を追い求めてきた。

時代が平成、令和へと移行するにつれ、国内でも生活格差が顕在化したためか、漠然とした「中流感の空気」は希薄になったが、むしろ人々の品格は洗練の度合いを深めたようにも感じる。街を歩いていても、買い物をしていても、交通機関を利用していても、人々の振る舞いは、おおむね控え目で礼儀正しい。規範を重んじる日本人の「かたち」は、社会全体の「かたち」を投影しているのだろう。

その一方で...

日本人は「勝負事が好き」

西暦689年には、持統天皇が賭博としての「双六の禁止令」を出した。夫だった天武天皇がギャンブル好きで、双六大会を開いて、御衣、袴などをほかの後続や貴族に取られたとの説もある。

以後、鎌倉時代、平安時代、江戸時代のどこでもサイコロやかるたを使った賭博は生き残り、社会のどこかで、世代から世代へと勝負への希求が受け継がれてきた。「日本人は勝負事が好き」との角度から視点を向けると、昭和、平成、そして令和に至る近代生活において、1本の線が見えてくる。

ギャンブルがギャンブルたる所以は、かなりの割合で「ツキ」「運」が介入すること

・駄菓子屋、ガチャ、お祭り・縁日、福引、おみくじ



東京・品川区。1952年7月



1969年1月





依存者の多いギャンブル

- ・ パチンコ・パチスロ（法的には遊戯w）
- ・ 競馬、競輪、競艇、オートレースなどの公営競技
- ・ 麻雀、カードゲーム
- ・ 宝くじ

→ 日本はギャンブル天国

パチンコ店、麻雀荘、場外馬券場、宝くじ売り場

* 全日本遊技事業協同組合加盟のパチンコ店6217店（2024年3月）

* 宝くじ売り場数

（ドトール、スタバ、コメダ、タリーズ、プロントの合計が約5200店舗）

* 書店数 8169店（2022年末）

「博打ってものア、大きな顔で人前でやるもんじゃねえって教わってきた。俺たちはいつもコソコソ、裏街道を歩いてきたもんだ。ところが、有難え世の中になったもんじゃねえか。戦争に負けたおかげで、大通りに堂々と、博打宿が出せるんだとよ」（『麻雀放浪記』阿佐田哲也 角川文庫）

国内のギャンブル規模

- 国内におけるパチンコ参加人口、つまり年に1度以上訪れた人の数は、前年から60万人減の890万人で、その市場規模は7000億円減って20兆円（日本生産性本部「レジャー白書の2020年版」）。
- 中央、地方の両方を合わせた競馬人口。日本中央競馬会（JRA）の発表によると、2020年の総売り上げは2兆9834億円。地方競馬のトータルが9000億円代と言われているので、ざっと4兆円近い売り上げ規模。
- ゲーム業界は1兆7330億円（2020年「ファミ通白書」）、出版業界は紙と電子合わせて1億5430円（2020年全国出版協会）。音楽業界に至ってはCDなどのソフト、配信を合わせても2998億円（2019年日本レコード協会）。もっとも音楽は、サブスクリプションと呼ばれる定額制の聴き放題サービスが大きくなっているので市場規模はもう少し大きい。
- パチンコ、そして競馬の市場規模のモンスターぶり。1990年代にパチンコ市場が30兆円と言われていたので、下落傾向にあるのは間違いない。出版も音楽も構造的不況に苦しんでいることを考慮すると、いまだに20兆円規模もあるのは、根強いファンがいる証左でもある。
- フォーブスが発表した日本の長者番付に目を移すと、1位柳井正氏（ファーストリテイリング）、2位孫正義氏（ソフトバンク）らに連なる10位に、パチンコ機器メーカーSANKYOの創業者の毒島秀行氏、11位にはパチンコ店グループ・マルハンの創業者の韓昌祐氏の名前が。

日本国内にもカジノが

日本で本格的なカジノ導入が現実味を帯びたのは、1999年、石原慎太郎氏が「お台場カジノ構想」を公約に盛り込み、都知事当選を果たした → 国民の賛否は二分

【推進派の言い分】

雇用の創出や流動性の向上、地域活性化、インフラ整備、税収アップなど、カジノ導入の先に見える経済的メリット

【否定派の言い分】

「治安」「金の流れの不透明性」「ギャンブル依存」。もっと主観的に「穏やかで落ち着いた日本社会にとってはマイナス」

国内のどこにカジノが？

- 19年9月24日、政府は「カジノ開業についての自治体の意向調査」を発表した。それによると、大阪府・市、和歌山県、長崎県、横浜市のほか、北海道、東京都、千葉市、名古屋市が申請の可能性を明らかに
- 現時点で残っているのは大阪、長崎。長崎は資金調達に不安があり、国交省から「不認定」とされ、再チャレンジへ
- 和歌山は県議会が否決　横浜は反対勢力だった山中竹春氏が当選　北海道は事業者の財政悪化で誘致真正を見送り　千葉は19年の台風被害の復興優先　東京は新型コロナでの混乱と都議会で反対意見が根強い　名古屋は常滑と競合

- 日本MGMリゾートのジェイソン・ハイランド社長「日本のIR整備法が定めるカジノのシェア面積割合は3%。したがって、IRの主役はカジノではない。国際会議場、展示場、それに数千規模の客室を擁するホテル、美術館、公園、アリーナ、劇場、温泉施設など」（著書「IRで日本が変わる」（角川書店））。
- MGMリゾートは、アメリカ合衆国ネバダ州ラスベガスに本社を置く統合型リゾート運営会社。ベラージオ、MGMグランド、マンダレイ・ベイ、ザ・ミラージュといった、ラスベガスのカジノホテルを運営する企業の一つ。
- 「IR整備法」の正式名称は「特定複合観光施設区域整備法」で、総面積におけるカジノの割合がわずか3%といっても、国際会議場、展示場、ホテルなどが林立するスペースとなるわけだから、カジノはイメージ以上に広大になる。

「カジノが儲かると誰が損するか」

- 米国イリノイ州の納税申告書に基づいた調査で、カジノの周囲8キロ以内の店舗や事業所では増益を記録したが、8キロから16キロの地点になると大きく減益となったという。結果的に「イリノイ州のカジノは地域の経済開発にとって「必ずしも役に立っていない」を結論づけた。
- 人間の欲望が渦巻く賭場（カジノ）には、勝負の札束が飛び交う以前に、人が集まり、食事をし、宿を求める。モノも売れる。海外からの客を含めた集客だって、それなりに期待できそうだ。一方、そこから少し離れた場所からは、人とカネの流れが奪われる「逆ドーナツ減少」が起こるという。

いつか来た道？

- 1990年代初頭に開催された「日米構造協議」

1990年代後半から、地方都市では郊外型の大規模なショッピングモールが増えていくのに合わせて、街の中心部にはシャッター街が広がるように。街の要素となっていた小売店舗を守るために存在していた「大規模小売店舗法」が撤廃された

郊外に大型ショッピングモールができることで、雇用の創出や流動性にも効果があった。シャッター街の出現と引き換えに、人々が受けた恩恵もある。

ただし。

大型ショッピングモールとIRは混同できない。各地に大規模店舗が増えたことで利益が出たのは、セブン＆アイやイオン、大手家電量販店などの国内企業だが、IR（カジノ）の場合はすべてが海外企業だ。長い時間をかけて作られ、熟成されてきた「日本の街」が廃れていき、儲かるのは海外企業という構図。



J R 本庄駅近くの商店街（19年 8 月 17時43分）



丸亀市の商店街（09年 4 月）

ギャンブル依存の治療に

2020年4月、集団治療が保険適用にw

- ・ 22年度の国民医療費 45兆359億円（前年比4.8%増）
- ・ ギャンブル依存で医療機関を訪れた患者は、2017年度で3499人。
1回あたりの患者負担額は3割の900円で、医療機関が請求できる額は2700円

最初から実効性は問題ではなく、「健保にとって大した金額になりそうもないから、『ギャンブル依存に取り組んでいる姿勢』を見せるために、保険適用にしまえ」

カジノへの入場制限？

- 日本人客の入場料「1回6000円」
- 入場回数は「週3回かつ月10回まで」

*ICチップ付きのマイナンバーカードで確認

自民党の部会では「利用客の利便性を損なう」との意見も



「入場料だけで6000円も払うのだから、最低、それを取り戻さなければ」

ギャンブル依存と医療

- 「意志のチカラでなんとかなる」 ???
- ギャンブル依存は、アメリカ精神医学会がアルコールや薬物などによる「物質関連障害および嗜癖(しへき)性障害群」と同様に分類している疾病 (disorder)
- ギャンブルをやらない人は、「なぜ、すっぱりやめられないのか」とまったく理解できない。だが、ギャンブルを続けることで、過剰な刺激を受けた脳内の神経路である「報酬系」に異常をきたしている「病気」
- 同じ報酬系への刺激物質である覚醒剤などの依存に陥った人が、なかなか離脱できず、再発を繰り返すことをイメージすれば、ギャンブルも意志の力で抜け出せるほど簡単なものではない

なぜ、ギャンブルに依存してしまうのか

ドーパミン

神経伝達物質の一つ。別名「幸せホルモン」とも呼ばれ、人格や運動機能、意欲などにかかわる

お酒や薬物、たばこなどの依存物質を摂取すると大量に放出される。とくに「報酬を期待」しているときに活発に分泌される。ここがギャンブル依存の最大のメカニズムとされている

「今日は勝つ！」 「勝てるかもしれない」 「財布をふくらませてやる！」

集中力を高める効果も

キーワードは「報酬期待」

ドーパミンは「気持ちいい」「幸福を感じる」「意欲的になる」などの状態にかかわるホルモンで、ギャンブル依存者は、賭け事によって活動性が高まり、精神的な依存状態が形成されていくことがわかっている。ギャンブルが身近にあるほど、報酬期待のスイッチは入りやすくなり、依存への危険は増す。

ギャンブルについて「勝負に勝ったときに脳内でドーパミンが活発になるわけではなく、『今日は勝てるんじゃないか、儲かるんじゃないか』と、報酬への期待を抱いているときのほうが活発になる」（精神科医・蒲生裕司医師）。

医療者ができること

具体的な治療法は固まっていない

カウンセリング、入院、グループワークなど。

アルコールや薬物には離脱症状が出る場合が多いので、身体的な手当てや管理が不可欠。一方、ギャンブルの離脱症状に対しては、イライラ対策など、精神的なケアがほとんど

問題が、ギャンブル依存だけなのかを見極める。重度のギャンブル依存に陥っている人には、かなり高い確率でうつ病が見られる

うつが原因で思考が止まってしまっている人に、認知行動療法をやっても効果はない。きちんと頭が働く状態にもっていくために、まずはうつ病の治療が必要になる

ギャンブルがきっかけで、経済面に問題を抱えたことでうつ病、さらに自殺念慮につながっている人などは、視野狭窄に陥っていることが少なくない。まずは、物理的に安全な場所で、少しゆっくりしてもらうことが大切。病院への入院に限らず、依存症回復施設などで穏やかに時間を過ごすことが、改善を促す場合もある。

「生きづらさ」との関係

うまく社会の波に乗れない不満、日常生活におけるフラストレーションから「生きづらさ」を感じてしまう層がいる

それから逃れたくて、アイドルやアニメに没入してしまう人もいるし、風俗やキャバクラなどに救いを求める人もいる。すべてが悪いわけではないが、仕事や勉強、家族や友人・知人とのコミュニケーションなど、当たり前の社会生活が阻害されようになると、生きづらさへの「救い」が「問題」へと変わってしまうことがある

生きづらさからギャンブルに走り、結果的にうつ病になる人も。ギャンブル依存者には、過去にうつ病を発症した経験があったり、躁鬱の傾向があったりするケースも少なくない

「出口」はどこか

精神疾患は、科学的な「仮説」に基づいて治療する。血液検査や画像診断などではっきり結果や経過が出るわけではない。症状が劇的に改善するわけではなく、治療には時間がかかる。「薬を出して終わり」ではない。

精神科には、薬の選択などを考えるよりも、患者さんに寄り添いたいと考えている医師がいる

地域の精神保健福祉センターに相談。それぞれの地方で、ギャンブル依存を扱っている医療機関を把握しているはず。医療機関だけでなく、自助団体や回復施設のことなども教えてくれる

何年も医療機関で治療をし続けることは現実的ではない。医療機関にかかっても、どこかのタイミングで自助グループ、回復施設との連携が欠かせなくなる。

スタート地点として医療機関に行く。うつ病や統合失調症などの原因があって、ギャンブル障害を起こしているのなら、状況を見極めて、対処できる。ただし、依存状態から抜け出すためのメインの部分は、医療よりも、自助団体のほうが適している

ハイリスク・ハイリターンか、手堅くいくか——。こうした意思決定に関わる脳の領域を、ニホンザルを使った実験で突き止めた、京都大や奈良先端科学技術大学院大などの研究チームが発表した。ギャンブル依存症の治療などにつながる可能性があるという。論文が、科学誌サイエンスに掲載された。

佐々木亮・京大助教らは、意思決定に重要な役割を果たす中脳から、体の動きに関わる大脳の「運動前野」へとつながる神経細胞に光を当てることで、運動前野の様々な部位を刺激できる手法に着目。2ミリ・メートル間隔で並べた発光ダイオード（LED）を運動前野に取り付けた6匹のサルに、「90%の確率でわずかなジュースをもらえる場合」と、「10%の確率で多くのジュースをもらえる場合」のどちらかを選ばせるといった実験を行った。

その結果、運動前野の特定の部位を刺激すると、低い確率でも多くのジュースがもらえる「ハイリスク・ハイリターン型」の嗜好（しこう）性が強まった。この刺激を2週間続けると、それ以降は刺激しなくても多い方を選ぶようになった。一方で、近くにある別の部位を刺激すると、こうした嗜好性は弱くなった。

佐々木助教は「人間の依存症にも同じ領域が関わっていると考えられる。**頭の外側から磁気などで運動前野を刺激できれば、ギャンブルや薬物の依存症治療につながる可能性がある**」と話す。

池谷裕二・東京大教授（神経薬理学）の話「ニホンザルを使った非常に精密な実験で、脳の近接した部位に嗜好性にかかわる正反対の機能があることを示した点は驚きだ。これまでに知られていないような神経の機能もうかがえ、興味深い」